

小中高校生のインターネット利用の実態調査を踏まえた問題対応策の共同創案

代表研究者

竹内 和雄

兵庫県立大 環境人間学部 准教授

1 はじめに

子どもたちのネット依存・ネットいじめ・高額課金・出会い系サイト等での被害等が社会問題になっている。重篤性や緊急性についての指摘は多く、これまでも自治体や教育機関等で様々な対策がなされてきたが、十分な成果があがっているとは言い難い。これまでの対策の多くは大人主体で、「禁止」「制限」が中心であった。全国的には「フィルタリング設定の奨励」、各地の取組としては、「中学生の携帯電話所持を禁止する条例」（石川県）や「21 時以降の小中学生の使用禁止」（愛知県刈谷市）等が注目を集めた。これらは一定の成果を上げたが、子どもたちのネット利用がより一般化し、さらに小学生のスマホ所有率が 6 割を超えている（デジタルアーツ、2017）現状を考えると、「制限」「禁止」だけでは限界がある。

これまでの研究は、『サイバー型いじめ』（Cyber Bullying）の理解と対応に関する教育心理学的展望」（小野・斎藤、2008）等、ネットいじめ関連の研究が中心であった。さらに近年、「ワンクリック詐欺疑似体験教材の開発」（新谷・長谷川、2013）、「デモンストレーションを行った教材開発」（鈴木ら、2012）等、ネット上で青少年が被害に遭わないための対応実践の研究が始められ、体験型プログラムの有用性が示されている。しかし、これらの研究は、大人が対応策を考え、子どもに提供する形をとっているため、急速に変化するインターネット上の子どもたちの所作についていくことができず、どうしても対応が後手にまわってしまう。大人の実態把握が遅れてしまうことと、子どもたちへの有効な対応策について、大人の感覚だけではうまくいかないからである。このあたりについては拙書にも詳しい。

また、中高生への急激な普及に伴い、インターネットの問題は、デートDV、JKビジネス等の課題に結びつき始めている。本研究ではそのあたりも対象に加えて取り組んだ。



写真1 A市のスマホサミットの様子（各中学校の生徒会執行部員が参加）

研究代表者は、元中学校教師で、この問題に長く関わってきた。2012 年 12 月からは「スマートフォン時代に対応した青少年のインターネット利用に関する連絡会」（総務省近畿総合通信局）の座長として、近畿各地の青少年とインターネットの問題について尽力してきた。総務省の施策への協力等だけでなく、近畿 2 府 4 県での講演や研修講師等も積極的に行ってきた。

2013 年頃から、この問題が特に大きくなってきたので、各地の子どもたちを集めて、子どもたち自身が議論する機会を多く作ってきた。大阪府スマホサミット（大阪府）、兵庫県スマホサミット（兵庫県）、滋賀県スマホサミット（滋賀県 P T A 連絡協議会）、青少年いいねッ京フォーラム（京都府警察）、和歌山県中学生サミット（和歌山県教育委員会）、奈良市中学生サミット（奈良市）等である。各地の要望に応じる形で、コーディネーターとして関わってきたため、実施形態、主催者等もまちまちであるが、2016 年実績として近畿 2 府 4 県で、延べ 15 回実施し、アンケート対象は 30,000 人を超えている。

2 研究の目的

以上のような状況を踏まえて、本研究では、子どもたちが自分たちのインターネット利用について考える機会である「スマホサミット」の場で、何が行われ、どのような実態がわかり、さらにどういう対策が必要であるかについて明らかにすることを目的とする。子どもたちのインターネット問題の解決に向けた取組の中心に子どもたち自身を据えることで、大人だけでは見えづらい、実態把握ができ、さらに実態把握からわかってきた課題についての解決策についても子どもたちと大人をつないで見いだしていくことまでを視野に入れた研究である。

この問題は大人だけの解決が難しく、かといって子どもだけでも効果が薄い。子どもと大人が共に考え、今後のインターネット問題に対する対策の方向性を提案したい。小学校や中学校、高等学校でのインターネット問題解決のための実践に寄与し、また P T A 等を通して、各家庭の対策に有意義に使われるようなものにできれば、今日的な意義は高いと考える。

3 研究の方法

3-1 スマホサミットの実施場所と概要

今回、コーディネーターとして支援した「スマホサミット」等の実施主体、日時、概要を地区ごとに記載する。なお、「配慮が必要な児童生徒対象」「新たな課題に対応したもの」は別にしている。

（1）都道府県単位

大阪府スマホサミット（主催：大阪府青少年課）

- 06 月 11 日 第 1 回 情報交換及びアンケート作成
- 09 月 11 日 第 2 回 アンケート結果分析及び 3 か条作成
- 10 月 29 日 第 3 回 啓発資料作成
- 12 月 17 日 成果発表会（大阪市西区民会館）

スマホサミット in ひょうご（主催：兵庫県青少年課）

- 06 月 25 日 第 1 回 情報交換及びアンケート作成
- 10 月 15 日 第 2 回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 12 月 16 日 成果報告会（兵庫県公館）

滋賀県スマホサミット（主催：滋賀県 P T A 連絡協議会）

- 07 月 23 日 第 1 回 情報交換及びアンケート作成
- 09 月 02 日 成果発表会（野洲市民会館）

いいねッと京フォーラム（主催：京都府警察 京都府青少年課）

- 05 年 25 日 情報収集（下京中）
- 07 月 15 日 事前学習会（京都府警察 110 番センター）
- 08 月 05 日 成果発表会（京都ロームシアター）

関西スマホサミット（近畿総合通信局スマホ連絡会 近畿 P T A 連絡協議会）

- 11 月 19 日 事前学習会
- 01 月 27 日 成果発表会（大阪市西区民会館）

岡山スマホサミット（岡山県教育委員会、山陽新聞社）

- 05月28日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 05月29日 情報収集（岡山県立芳泉高校）
- 06月05日 教員への情報提供（岡山県教育センター）
- 07月25日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 08月08日 成果報告会（岡山大学金光ホール）

富山県ネットルールづくり（富山県教育委員会）

- 05月24日 富山県ネットトラブル防止指導者研修会（座長）
- 06月07日 舟橋村スマホルール作りサミット
- 06月08日 上市中学校スマホルール作りワークショップ
- 08月22日 フォローアップ研修会（指導者）

（２）市町村単位

たつの市中学生サミット（兵庫県たつの市教育委員会）

- 08月01日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 12月03日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 12月03日 第2回 保護者への報告会

小松市中学生サミット（石川県小松市中学生サミット）

- 04月17日 予備会 教員（生徒会顧問）との打合せ
- 06月06日 第1回 情報交換及びアンケート作成
- 07月27日 第2回 アンケート結果分析及び啓発資料作成
- 09月27日 保護者会 小松市PTA協議会との協議会
- 10月14日 成果報告会（小松市民会館）

芦屋市スマホサミット（兵庫県芦屋市スマホサミット）

- 05月28日 打ち合わせ 教育委員会及びNHK
- 06年14日 YouTube サミット（芦屋市立精道小学校）
- 07月19日 第1回 情報交換及びアンケート結果分析
- 02月28日 第2回 成果報告会

多可町スマホサミット（兵庫県多可町教育委員会）

- 08月04日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成
- 08月04日 教員への報告会

三木市スマホサミット（兵庫県三木市教育委員会）

- 08月09日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成
- 08月22日 教員への報告会

相生市スマホサミット（兵庫県相生市教育委員会）

- 08月24日 アンケート結果分析及びスマホ3か条作成

寝屋川市中学生サミット（大阪府寝屋川市教育委員会）

- 04月28日 ネット問題有識者会議
- 05月07日 情報交換及びアンケート作成
- 08月23日 教員研修（以後、継続支援）

神戸市スマホフォーラム（兵庫県神戸市）

- 05月22日 アンケート作りワークショップ
（西代中、港島中等、上野中、兵庫中）

- 07月24日 神戸市いきいき生徒会会議

- 08月27日 神戸市スマホフォーラム

神戸市教え合い学習（兵庫県神戸市教育委員会）

- 09月08日 春日野小 1日目 情報交換ワークショップ
- 09月15日 2日目 啓発資料作成
- 09月20日 3日目 6年生が下級生に啓発授業
- 09月13日 水木小 1日目 情報交換ワークショップ
- 09月27日 2日目 啓発資料作成
- 10月04日 3日目 6年生が下級生に啓発授業

10月27日 室内小 1日目 情報交換ワークショップ
11月01日 2日目 啓発資料作成
11月15日 3日目 6年生が下級生に啓発授業

(3) 配慮が必要な児童生徒対象

兵庫県立阪神特別支援学校

06月16日 教員研修会（以後、継続支援）

鳥取県立琴の浦特別支援学校

06月27日 教員研修

11月14日 研究打ち合わせ（アンケート分析等）

12月05日 研究発表会（鳥取県教委）

岡山県立岡山東特別支援学校

09月01日 教員研修会及び研究打ち合わせ

01月31日 研究発表会（岡山県教委）

兵庫県立錦城高校（定時制）

04月18日 教員研修会（以後、継続支援）

大阪府立寝屋川高校（定時制）

07月14日 生徒対象講演会（以後、継続支援）

兵庫県立姫路北高校（定時制）

10月20日 教員研修会（以後、継続支援予定）

(4) 新たな課題に対応したもの

08月21日 スマホに潜む危険を考えるシンポジウム～デートDV&JKビジネス～



写真2 B市スマホサミットの様子（市内小中学生での議論）

3-2 スマホサミットの詳細（内容等）

「スマホサミット」が先にある、それが広がったのはなく、各地の子どもたちの実態に応じて、それぞれの実施主体が課題解決のために「スマホサミット」の実施を決め、そのコーディネートしていったというのが実情である。そのため、日数、実施内容を含めて、多様な形式がある。すべての「スマホサミット」に共通しているは、「子どもたち自身が自分たちのスマホ使用の実態を出し合い、対策を考える」ことである。実際のサミットの開催日数は、1～4日間と様々であるが、最も一般的な3日間の基本的な流れを記載する。

(1) 1日目 スマホの使用の実態共有

各地で20～50人の児童生徒が集まって、自分たちのスマホ使用について考える。生徒会執行部員、学年代表等、参加する子どもたちはそれぞれの場所によって様々であるが、基本的にはそれぞれのコミュニティを代表して参加している。1日目は、アイスブレイクに力を入れ、形態は多少の違いはあるが、最初に使用実態を共有する。多くの場合、6人程度の班で「ネットの良いところ、

悪いところ」をKJ法的な手法を用いて共有する。地域ごとの違いはあまりなく、3ヶ月くらいの短い時間で、子どもたちが多く使うアプリ等が変わっていくことが多い。昔は、口伝で傳承していった文化が、インターネット上で一気に広がって行く様子がわかる。出た意見を参考にして、子どもたちがアンケート項目を考え、次回までに実施、集計、分析する。集計、分析については、各地の大人と当会が協力して行っている。

(2) 2日目 アンケート分析及びルールづくり

まず、アンケート結果を元に自分たちの課題を絞り込む。多くの場合、「依存（時間、お金）」「人間関係（ネットいじめ等）」「危険（出会い、炎上等）」に課題が集約さえるが、地域によって特殊な課題がわかったときは、それも話し合う。その課題に対応したルールづくりをする。さらに啓発のための具体物を制作し、以後の活動に活かしていく。

(3) 3日目 成果発表会

一連の取り組みの成果を発表する機会である。子どもたちだけでなく、その地域の大人も参加して共に考える機会としている。アンケート結果発表を行い、その結果、自分たちがどのような対策を考え、実際にどういうことを行ったかを発表する。多くの場合は、実際の取り組んだ児童生徒諸君がパネルディスカッション形式で、自分の考え、思いを語ることが多い。

3-3 スマホサミットへの関与方法

(1) コーディネーター

それぞれの地域の持つ課題を読み取り、サミット全体の流れや方向性を主催者と相談してコーディネートすることがまず大きな関与である。主催者の思いも様々で、関与度合いも様々であるため、この段階が非常に重要である。特に、現状では主催者が異なる場合が多く、関与できることに幅がある。教育委員会、青少年課、警察、新聞社、PTAなど、それぞれが扱うことができることが異なっているので、当然変わってくるが多い。この役割は、主に研究代表者があつた。

(2) ファシリテーター

実際のサミットでは、子どもたちが円滑に議論していくためには、自分たち以外の第三者が必要である。以前は学校教員が担当することもあったが、教員にはよくない使い方を抑制するための働きも求められるため、教員がファシリテーターになるとうまくいかないことも多かった。そこで最近のサミットでは、事前に研修を積んだソーシャルメディア研究会所属の大学生がファシリテーターとして参加している。概ね6人程度の班に1名の大学生が関わっている。

(3) データ分析

子どもたちが作成したアンケートを、子どもたちが求める形で分析して子どもたちに提示する役割である。研究代表者とソーシャルメディア研究会所属の大学生が担当している。

(4) 啓発資料制作補助

子どもたちは啓発資料を作って、自分たちの啓発に役立てたいと言うことが多い。以前は、ポスター、チラシ、新聞等のアナログなものが多かったが、最近では、啓発動画や啓発CM等のデジタルなものが増えている。そういった動画制作にソーシャルメディア研究会所属の大学生が関わっている。子どもたち発案のシナリオを実現可能なものにして、2～3分にまとめている。

(5) 発表会運営、補助

発表会は、司会進行から舞台転換まで、基本的に子どもたちだけで運営する。そのための台本づくりや練習や補助には研究代表者とソーシャルメディア研究会所属の大学生が関わっている。

なお、ソーシャルメディア研究会は、研究代表者のもとに2012年頃に自然発生的に集まってきた、学生達の集まりである。もとは教職を目指す学生たちが、プレゼン能力向上や授業力向上のために研究代表者のもとに集まってきたもので、単位取得等のメリットはない。研究代表者が各地で行っている、小中学生対象の情報モラル講座やスマホサミット等に関心を持つようになり、現在は、研究代表者とともに情報モラル講座を行ったり、スマホサミットのファシリテーターやアンケート分析、発表会補助などをしたりするようになっている。

4 研究の結果と考察

今回実施したサミットうち、「スマホに潜む危険を考えるシンポジウム～デートDV＆JKビジネス～」
「小松市中学生サミット」の結果を記載する

4-1 スマホに潜む危険を考えるシンポジウム～デートDV＆JKビジネス～

このシンポジウムは、大阪スマホサミットの流れの中で実施された。典型例ではないが、今日的な課題解決に向けて重要な発見が数多くできたので、ここでまず報告する。

(1) 取り組みの背景

研究代表者は平成 27 年から、大阪市生野区社会福祉協議会地域福祉アクションプラン「デートDV防止推進部会」とともに、高校生自身によるデートDV防止の取り組みを支援してきている。これまで高校生手作りのアンケート調査を行い、その結果をもとに、中学校等で出前授業を行ったり、高校生の意見交流を通したシンポジウム等に関わったりしてきた。これまでの調査で、「携帯電話をいつもチェックされる」「異性のアドレス等を勝手に消去される」「携帯電話を使って一日中束縛する」等、携帯電話、インターネット等が深く関わっていることがわかっている。「さらに大阪府青少年健全育成審議会特別部会に委員として参加しており、そこでの審議する内容としてJKビジネスについても調査研究している。その中で、JKビジネスの入り口としてインターネットがあげられることが多いこともわかっている。こういう流れの中、この取り組みでは、高校生自身の考えをいかす形でデートDVやJKビジネスについて意識調査と対策創案に取り組んだ。

なお、デートDVとは「配偶者間や恋人などの親密な間柄で起こる暴力をドメスティック・バイオレンス(DV)といい、その中でも恋人同士の間で起こる暴力は、「デートDV」と呼ばれます」(大阪府 2018)。JKビジネスとは「女子高校生等によるマッサージ、会話やゲームを楽しませるなどの接客サービス売り物とする営業」(警察庁 2018)である。JKビジネスについては、警察、内閣府等も喫緊の課題として認識があり、内海(2017)は警察の視点からJKビジネスについてまとめており、森本(2017)は、JKビジネスの対策、特に条例等での規制について記載している。

(2) 質問紙調査結果

調査1 デートDV調査

デートDVについての意識調査を関西の高校生対象に実施した。

実施時期：平成 29 年 7～9 月 対象：関西の高校生 352 人(男子 130 人 女子 222 人)

調査2 JKビジネス調査

JKビジネスについての意識調査を関西の高校生対象に実施した。

実施時期：平成 29 年 6～7 月 対象：関西の高校生 2812 人(男子 1255 人 女子 1557 人)

※どちらの調査も答えにくい質問には答えなくてもよいことを明記して行った。

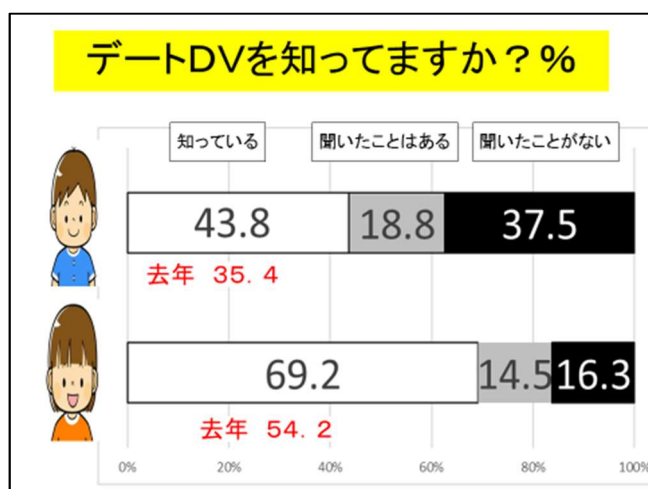


図1 デートDVの認知

①デートDVの認知

「デートDVを知っている」と答えたのは、男子 43.8%、女子 69.2%であった。学校等で扱われる機会も増えてきており、さらにマスコミ等で大きく撮り上げられる機会も増えているので、昨年度よりも認知度は上がっているが、それでも「知らない」と答える生徒も多い。

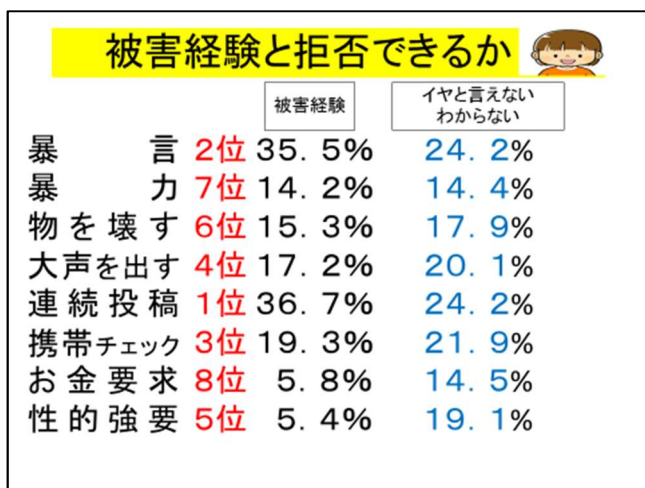


図2 デートDVの被害経験と拒否できるか

③JKビジネスで働く知り合い

『JKビジネス』で働いている15歳～18歳の知り合いがいる」と答えたのは、男性生徒の10.3%、女子生徒の20.2%であった。高校生の中で予想以上に「JKビジネス」が浸透していることがわかった。

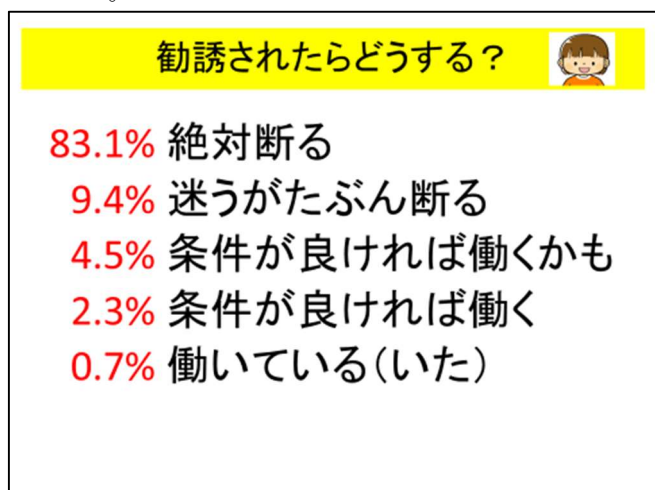


図3 JKビジネス勧誘されたらどうするか？

②デートDVの被害経験と拒否できるか

女子生徒の被害経験1～3位は、1位「LINE等の連続投稿」で36.7%。2位「暴言」35.5%、3位「携帯電話、スマホ等のチェック」19.3%であった。「暴力」が14.2%、「性的強要」が5.4%あり、深刻な実態が浮き彫りになった。

また、被害を受けたとき「イヤと言えない」「イヤと言えないかわからない」と答える女子生徒の割合も多く、具体的な対策が急務であることがわかった。

④JKビジネスに勧誘されたらどうするか

左は女子生徒の回答である。83.1%が「絶対断る」と回答しているが、それ以外の回答「迷うがたぶん断る」「条件が良ければ働くかも」「条件が良ければ働く」「働いている(いた)」の合計は16.9%である。さらに「条件が良ければ働くかも」「条件が良ければ働く」「働いている(いた)」の合計は7.5%にものぼる。

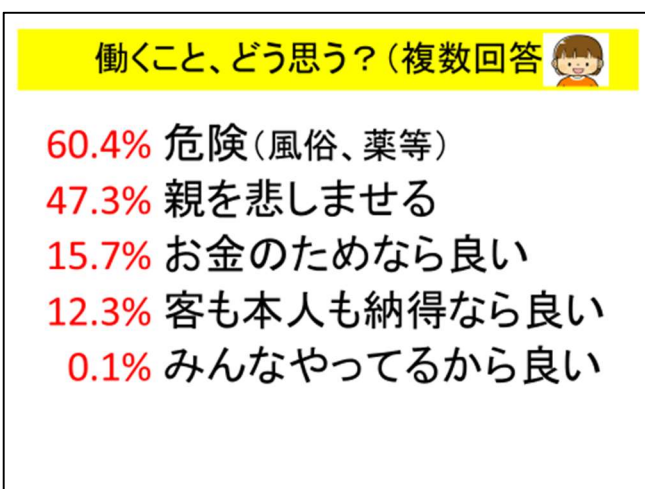


図4 JKビジネスで働くことをどう思う？

⑤JKビジネスで働くことをどう思うか？

左は女子生徒の回答(複数回答可)である。「風俗や薬物等に巻き込まれそうで危険」と答えたのは60.4%。「親を悲しませる」は47.3%。一方、「お金のためなら良い」は15.7%、「客も本人も納得しているから良い」12.3%、「みんなやっているから良い」0.1%であった。

(3) 半構造化インタビュー調査

「デートDV」「JKビジネス」について半構造化インタビュー調査を行った。インタビューに際して、前述のアンケート結果を見せている。

実施時期 平成29年7～9月

実施対象 関西の高校生52人

実施時間 負担を考え1人15分を基本とし、最長30分とした。

※答えにくい質問には答えなくて良いと伝えた。

※回答者は、アルバイトを認められている学校の生徒に限定した。

※セクハラにならないよう十分は配慮し、常に女性に同席のうえ行った。

※インタビュー後、デートDV、JKビジネス等の危険について、事例を挙げながら十分に説明した。

※必要な場合は関係機関につないだ。

A子(高2)

竹内 JKビジネス、どう思う？

A子 ウィン、ウィンだと思う。客も自分も納得してるんだたら他の人がどうこういうことじゃない。

竹内 危険と思わない？

A子 仕事内容によるかな。「カウンセリング」って、個室でしょ？いきなり襲われたりしたら逃げられないからやっぱり怖い。「お散歩」とかだったら、人通りの多い道を歩いたら、変なことされたら逃げられるから大丈夫。そのへんは、私たちもちゃんと考えてる。私たちもそんなに馬鹿じゃないよ。

A子は、「自分はしていない」と言い切ったが、アルバイトの一部として、JKビジネスを受け入れていた。

高額なアルバイト賃金を受け取ることができるので、ある程度の危険はしょうがないと思っているようだが、彼女なりに危険度については吟味しているつもりのようなだった。会話の端々から、実体験めいたものが聞き取れたが、A子は「友達に聞いたんだけど」と終始言っていた。また、JKビジネスに関わるきっかけは、友達の紹介とスマホで見かけた「高額バイト」等の広告が多いという。

図5 半構造化インタビューより（A子）

B子(高2)

竹内 JKビジネス、どう思う？

B子 率の良いバイト、って割り切ってる

竹内 お金のため？

B子 うん。でも、「ガールズバー」がほとんど。この前、テレビで「ガールズ耳かき」見たけど、そんな気持ち悪いことは私ら、絶対にしない。

竹内 何か基準はあるのかな？

B子 身体に触れられるのは絶対にいや。ガールズバーだったら、居酒屋バイトと変わらないし、まあ安全。触られたりしたら、ちゃんとした人が奥から出てきて、怒ってくれるんだって。

B子の周囲の友達も、「率の良いバイト」と割り切っていると話していて、JKビジネスにあたるのは「ガールズバー」が多いと言う。身体接触を避け、できるだけ安全な環境で働くようにしている。

居酒屋でのアルバイトからガールズバーに移る場合が多く、より高い時給を求めた結果が多いようである。危険についてもある程度認識しているが、きちんとした就業規則は見えていないが、身体接触をされた場合は、店側に申告したら対応してもらえる約束になっていると言う。

図6 半構造化インタビューより（B子）

C子(高3)

竹内 JKビジネス、どう思う？

C子 時給次第って言うてる子はいる。

竹内 時給良いの？

C子 ミニスカート系は他より500円くらい良いかな。時給高いと倍率上がる。でも、JKビジネスで働く子は一軍じゃなくて二軍。

竹内 二軍、なの？

C子 よく知らないけど、一軍は月ぎめ契約らしいよ。ツイッターとかで知り合いになるみたい。校門によくスポーツカーでお迎えみたいなの来てる。よく知らないけど。

C子自身は、JKビジネス等には嫌悪感を持つが、「まわりにはそういうバイトをしている子もいる」。あくまで聞いた話として、「一軍は月極契約」と話した。ツイッター等で知り合う30歳代の男性の場合が多く、月単位の契約でデートをしたりするそうだが、詳しい内容は知らないと言う。JKビジネスより時給が高いため、「コミュニケーション能力の高い一軍の子は、そっちを狙う」と聞いたことがあり、「できない二軍がガールズバーとかで働いているって聞いたことある」という。

図7 半構造化インタビューより（C子）

D子(高2)

竹内 デートDV、どう思う？

D子 そういう言葉、知らなかったけど、かなりある。好きな彼氏だったら、イヤと言いにくい。イヤと言って「別れる」と言われたら困るし。

竹内 好きだから断れない？

C子 束縛を愛情だって思っちゃう子もいるみたい。スマホをいつもチェックされたり、離れてるとき、ずっとLINE電話つないでたり。学校でもずっと一緒だし、学校帰り、離れた瞬間からずっと電話。無料だからイヤとも言いにくいし。

D子は、「デートDV」という言葉じたいは知らなかったが、実態として多く存在すると言う。多いのは、スマホ等を使った束縛で、LINE等の無料通話アプリを使って、「起きてから寝るまでずっと繋ぎっぱなし」のカップルもいると言う。「スピーカーにしてたら、手を離してもずっと会話してる感じになる」。頻繁に「スマホチェック」さえる例もあるが、「別れると言われそうで断りにくい」。

図8 半構造化インタビューより（D子）

E子(高3)

竹内 デートDV、どう思う？

E子 クラスの子とか学校の人だったら断りやすいけど、年上の彼氏だったら難しいみたい。今、ツイッターとかで出会うことって多いから、年上の彼氏持ち、けっこう多い。お金も車も持っているから、羨ましがってる子もいる。でも、エッチ動画見せられて「みんなやってるから」とか言われてイヤで別れた子がいるとかいないとか…。

竹内 誰かに相談しない？

E子 親に心配かけたくないし、先生はおおごとになる。友達は「おのろけ」って取られそうだし…。

E子の周囲では、年上の彼氏からの被害が多いと言う。ツイッター等で知り合うことが多く、「トップ画をかわいくしとくと知らない男の人から書き込みがある」。性的な動画を見せられること事態、デートDVだが、それを強要されたり、裸の動画を撮られて別れられなくなった他校生の例を聞いたことがあるので、E子自身は「絶対にツイッターの人とはつきあわない」と言っているが、「こういう相談はとてもしづらいそうで、友達にもいいにくいので、もしそういうことになったときに心配」と切実な表情で話していた。

図9 半構造化インタビューより（E子）

（３）ワークショップ及びパネルディスカッション

質問紙調査とインタビュー調査の一部を高校生に示して、実態についてと今後の対策についてのワークショップ及びパネルディスカッションを行った。ファシリテーターとして、ソーシャルメディア研究会の大学生と看護を学ぶ大学生及び高校生時代にデートＤＶの取り組みに関わった大学生が関わった。まだ、今回は、大学生には、必要に応じて、当事者としての関わりを許可した。

臨床心理士の資格を持つ大学研究者の指導助言を受け、警察の相談窓口の担当者が臨席し、危険性について十分に話してもらった。

実施日時 平成 29 年 8 月 21 日

実施場所 ワorkshop 大阪市生野区社会福祉協議会

パネルディスカッション 大阪市生野区役所 6 階会議室（聴衆約 80 名）

実施共催 大阪の子どもを守るネット対策事業実行委員会（文部科学省委託事業）

（事務局：大阪府青少年課・地域安全室青少年課）

生野区地域福祉アクションプラン デートＤＶ防止推進チーム

（合同事務局：生野区役所・生野区社会福祉協議会）

参加生徒 関西の高校生男女 8 人（男子 2 人 女子 6 人） 大学生 6 人

①ワークショップ

アンケート調査とインタビュー調査の一部を示し、実態と対策について話した。

デートＤＶは、予想以上に高校生の身近に存在しているようだ。彼氏、彼女の関係であるので、なかなか外に出ないので、深刻になるケースも多いと言う。最近では、男女交際がかなり低年齢化していて、参加者によると、「妹（小 5）には小 4 から彼氏がいる」「ネットでそういう情報にたくさん増えるので、私たちの時よりませている。スマホで『キスの仕方』を調べて驚いてお母さんと説教した」。

J K ビジネスは、その言葉じたいは知らない生徒もいたが、「ガールズバー」等は、バイト先の一つとして定着している。「安易にそういうバイトを選ぶ人もいるけど、テレビで危険なことを知ったから、私は絶対にしない」「お母さんが『絶対ダメ』と言ってる」という声もあり、外からの教育、情報提供の必要性を改めて感じた。

②パネルディスカッション

高校生 4 人をパネラーにアンケート結果等から、デートＤＶ、J K ビジネスについて話し合いました。午前中のワークショップの流れで、「デートＤＶ」の低年齢化が語られましたが、J K ビジネス等の性にまつわる問題の低年齢化を共有しました。「私たち高校生が、よく J K（女子高生）として当事者と言われますが、ネットでは J C（女子中学生）、J S（女子小学生）がよく話題になっています」「悪い大人は、本当に悪いと思います」という声も聞かれた。高校時代にこの取り組みに関わった大学生は、自身が中学校に出向いてデートＤＶについての授業を行った経験を話し、「中学生でも当事者意識を持っている生徒がたくさんいた。こういう取り組みがなお一層、必要だと思う」「J K ビジネスについても中学生、できたら小学生くらいから危険性を知らせてあげると良いと思う」等の発言が相次いだ。

会の最後に大阪府警察で相談業務に従事している方から、この種の問題についての実態、危険性について話していただいた。聞いていたい高校生からは「J K ビジネス等に関わって、日本中で悲惨なトラブルが起こっていて、大阪ももちろん例外ではないと思った」という感想が聞かれた。

聴衆からも多くの感想が寄せられた。「子どもたちの実態に驚いた（高校教員）」「小学校の教員だが、他人事ではすまないと感じた（小学校教員）」「親としてこういう問題を中 2 の娘に教えたいが、父親の私が言うのは何となく恥ずかしい。妻と話したい（中学校 P T A）」等である。

（４）考察

デートＤＶ、J K ビジネス等は、大人からは見えにくい課題である。デートＤＶは、主にカップル同士の人目に触れない所で行われ、J K ビジネスは高校生のアルバイト先のできごとであるからである。今回、この種の問題に焦点を当てて見てわかってきたことは、これらにインターネットが深く関わっていることである。3 つのポイントに整理して書いてみる。

1つ目は、「入口として」と「被害を受ける場所として」である。「入口として」のインターネット。JKビジネスでは、「率の良いアルバイト先」としてスマホから情報を得て関わる高校生が多くいることがわかった。彼らの多くはこの種の知識をスマホから得ている。またデートDVで性的強要を受ける場合、「エッチな動画を見せられて、みんなやってると言われる」等が聞かれ、彼らの生活にスマホが深く浸透しているが故の課題も見つかった。次に「被害を受ける場所として」のインターネット。デートDVでの被害はスマホにまつわる部分が多い。今回はLINEの無料通話を使って四六時中束縛する例や、スマホの中をチェックする例、異性のアドレス等を削除する例等が聞かれたが、リベンジポルノ等の事例にも発展しかねない。

2つ目は「深刻な低年齢化」。この種の問題についても、私たちの予想を超えた低年齢化が進んでいることがわかった。小学生からYouTube等の動画に日々接し、さまざまな情報をインターネットから得ている小学生たちはこういう問題についての情報も目にする機会も多い。特に小学生女子にその傾向が深刻である。

3つ目は「性情報の氾濫」。子どもたち、特に高校生たちへの性情報はまさに氾濫している。しかもゆがんだ形で伝わっている。女子高校生が自分たちを「JKブランド」と呼び、「商品価値が高い」と感じている状況には深く危惧している。

高校生自身の生の声を聞くことができたからこそわかってきたことが多い。これまで「スマホサミット」は、「普通の子どもたちのスマホ使用」を普通の子どもたちが調査し、対策を考え、発表することを目的としてきたが、今後はこのような大きな課題について考え、問題敵視していくことも重要だと考えている。

一方で、「寝た子を起こす」等の危惧が聞かれ、慎重に進める必要がある。今回は、学校教員だけでなく保護者の了解を得て進めたが、同意を得ることができなかった場合も複数あった。このあたりの慎重さが何より重要である。

4-2 小松市中学生サミット

小松市教委主催で、小松市のすべての中学校から生徒会執行部員が3名ずつ参加した。3年前から実施されている。石川県は条例で小中学生の携帯電話の所持が禁止されているが、実際はかなり普及していて、課題も多いという。そういう地域の取り組みだからこそ、意義深いと考えている。

(1) アンケート結果

小松市の中学生自身がアンケート項目から考えた。具体的には、他の地域の実践でのアンケートを参考して、一部変えて、市内すべての小4～中3対象に実施した。

対象：小学生（4年以上）2873人 中学生2912人 合計5785人 時期：2017年6月

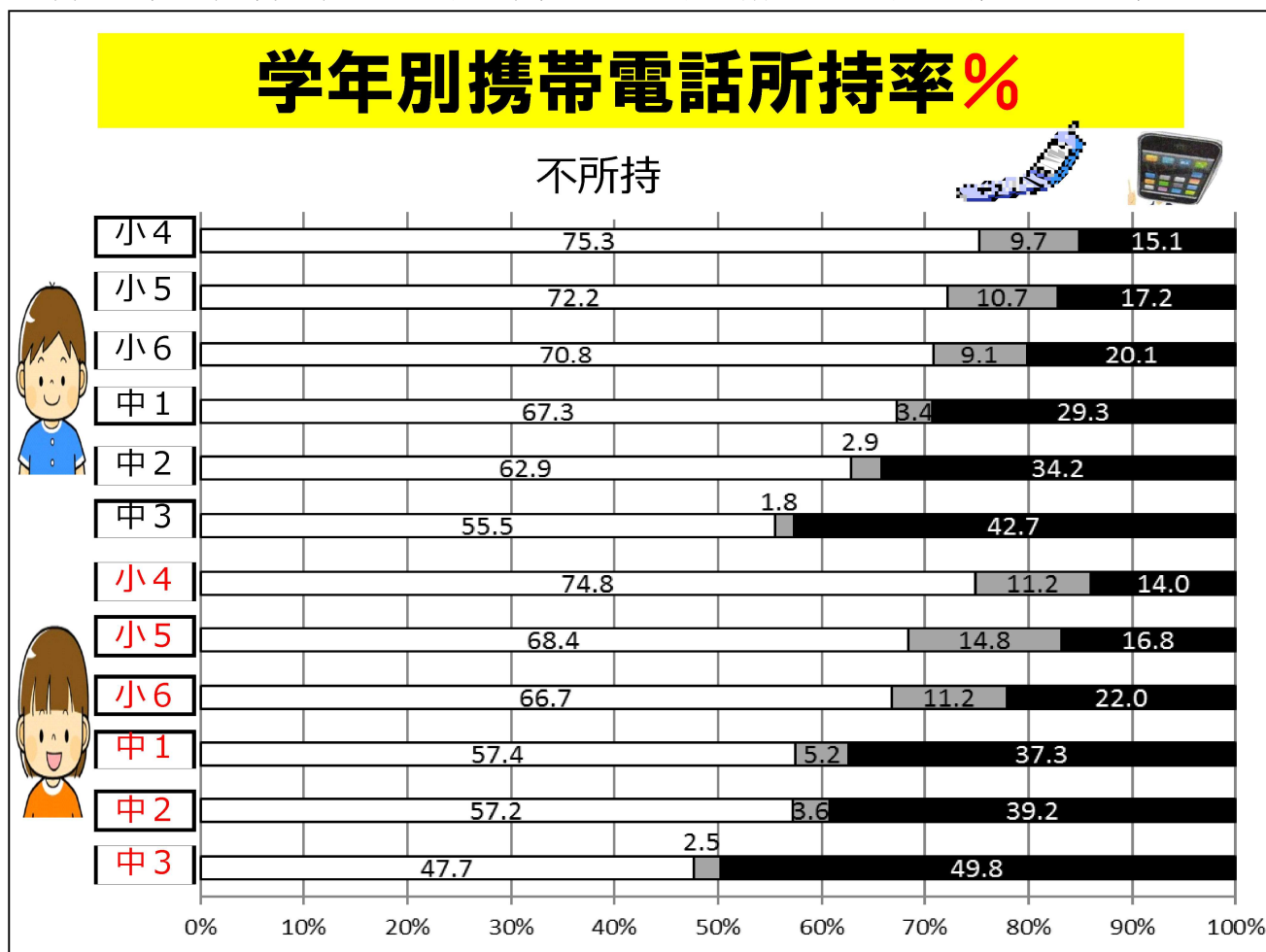


図10 学年別携帯電話所持率（小松市2017年）

小学4年生ですでに約25%がスマートフォンが携帯電話を、約15%がスマートフォンを所持していることがわかった。また中学生になると急激に所持が増え、機種もスマートフォンが増える。作成に関わった中学生にとっては、小学生への普及の早さ、広さは驚きであったようだ。

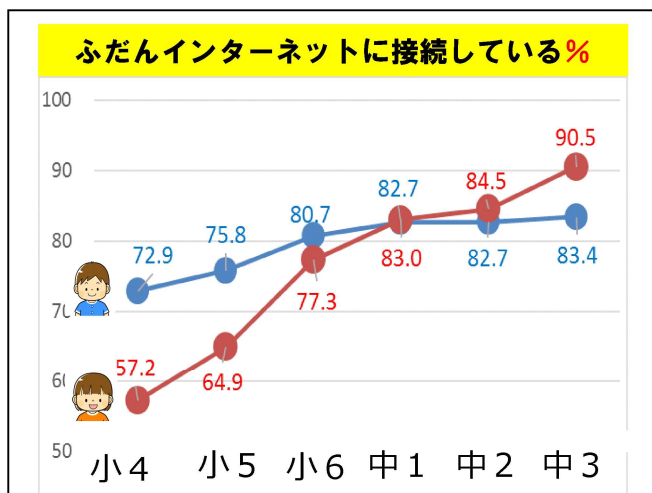


図 1 1 学年別男女別ネット接続率

日常的に家庭でインターネットに接続しているのは小4男子ですでに7割を超えている。小4女子は6割程度であり、小学校の間は、男子の方が多いが学年が上がるにつれ、女子の接続が増え、中学生になると逆転する。また、詳しく調べると、小学校時代は、男子はゲーム機から、女子はタブレットから接続することが多く、中学生以降と異なっている。

中学生によると、SNS、特にLINEでのやりとりが日常的になり、部活動等の諸連絡手段になっており「やっていないと不都合が増える」と言う。



図 1 2 学年別男女別接続機器の割合

男子は、小学生のネット接続はゲーム機で主に行われていることがわかった。具体的には3DS（任天堂）等の携帯ゲーム機である。それ自体は通信機能を持たないので、各家庭等のWi-Fiを利用している。

女子は小学生時代はタブレットからの接続である。保護者等が買い与えている場合が多い。

男女とも中学生になるとスマートフォンに移行していく。スマートフォンの持ち始めにトラブルが発生することが多いので、このあたりを啓発対象の中心にしていく必要があるだろう。

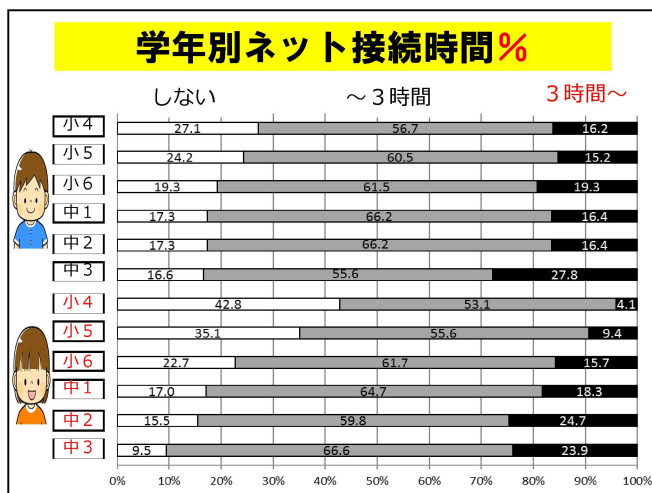


図 1 3 学年別男女別ネット接続時間

左は平日のネット接続時間である。

小学生でも10%以上が平日に3時間以上接続していると答え、中学生では25%を超える学年もある。

中学生は、「本当はもっと多いだろう」「遠慮して少なめに答えたのでは？」という反応であった。

「ゲームを遅くまでやっていて睡眠不足でイライラしている人がある」「SNSをやめられない。やめるきっかけがなかなか見つからない」等、深刻な声が多く聞かれた。

以下、使用時間ごとのクロス集計結果である。平日にネット接続を「しない」「3時間以内」「3時間以上」に分けて、それぞれの回答の割合を図示している。

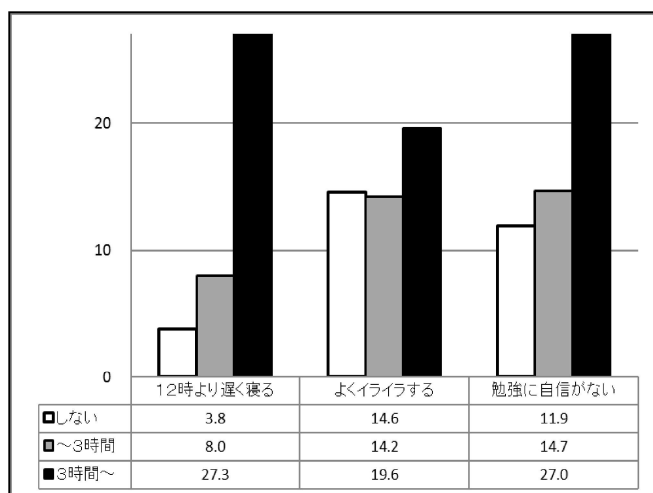


図 1 4 ネット接続時間による違い 1

「12時より遅く寝る」「イライラする」「勉強に自信がない」の3つの質問への回答は、「3時間以上」が最も多かった。

鶏が先か、卵が先か、の議論と同じで原因か結果かはこの調査からはわからないが、3時間以上の子どものに何かが起こっているのは確かだろう。

この結果について中学生からは、「ネットに睡眠時間や勉強時間を奪われてしまい、悪循環に陥ってしまっている」等の声が多かった。「特に勉強については深刻」という中学生自身から起こった。

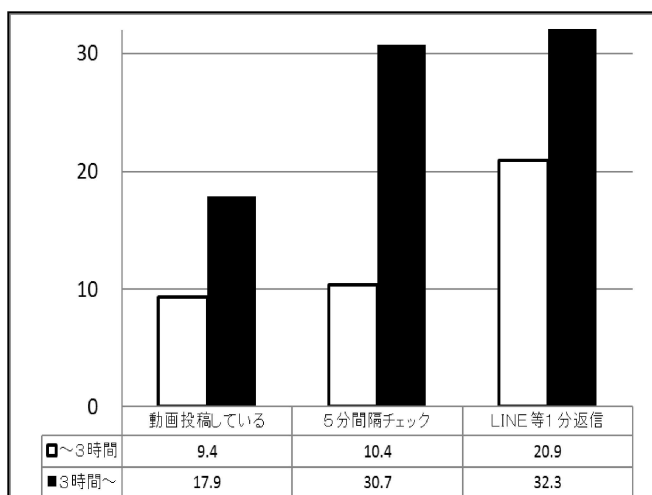


図 1 5 ネット接続時間による違い 2

ネット接続している子どもの中でのクロス集計結果である。結果分析した中学生からは、「YouTubeやインスタグラム等への投稿する人が増えている」「誰かからメッセージが来ないかなあと何度もスマホを見てしまう」「すぐに返信しないと友達とうまくいなくなる」等の声が上がった。

「勉強しながら」「テレビを見ながら」「食事をしながら」という場合も多かったが、「お風呂に入りながら」というのも多く、深刻さが伺えた。「家に帰ってからもずっと友達とつながっている」という女子が多かったが、「疲れるときもある」という声も多かった。

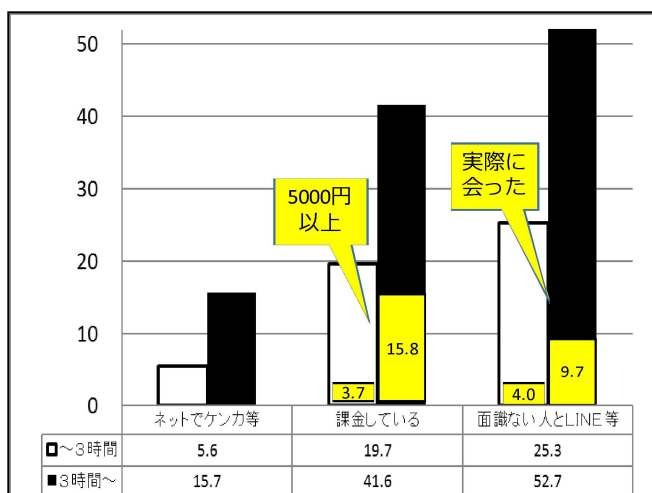


図 1 6 ネット接続時間による違い 3

「既読無視でのケンカは相変わらず多い」「ちょっとしか勘違いでケンカになる」等、LINE等の無料通話アプリでのトラブルの多さが中学生から指摘された。

さらに最近の問題として、「プリペイドカードをコンビニで買って課金する」「通販サイトで売り買いしている友達がいる」等の声もあがったが、「ネットがきっかけの出会いが怖い」という声が深刻である。「コンサート会場等だから安心」という声もあり、一般化の兆しを感じた。

(2) 小松市全体での取り組み

①小松市ネット三か条

小松市ネット三か条 2016

①時間編

時計見て！

今日もう終わるよ 大丈夫？

②人間関係編

その言葉

相手の前でも 言えますか？

③危険編

ネットでの この人いい人

それ本当？

図17 小松市ネット三か条

小松市の小中学生全体がキャッチフレーズ的に活用するために、「小松市ネット三か条」を作成した。

三か条は以前から作成する地域が多く、そのほとんどが「スマホは9時まで」等、具体的に子どもたちの行動を制限するものが多かったが、小松市の場合、子どもたちの意向でキャッチフレーズ的なものにとどめている。「中1の頃は9時に終わろうと思えば終われけど、中3になったら塾があるから、10時くらいから連絡を取り合うので、9時に終わるのは実際は無理」「形だけのルールになる」という声が上がリ、具体的な時間を設定せず、自分たちでルールを考えることを前提に、呼びかけ的なものにとどめている。

②小松市中中学生サミット通信

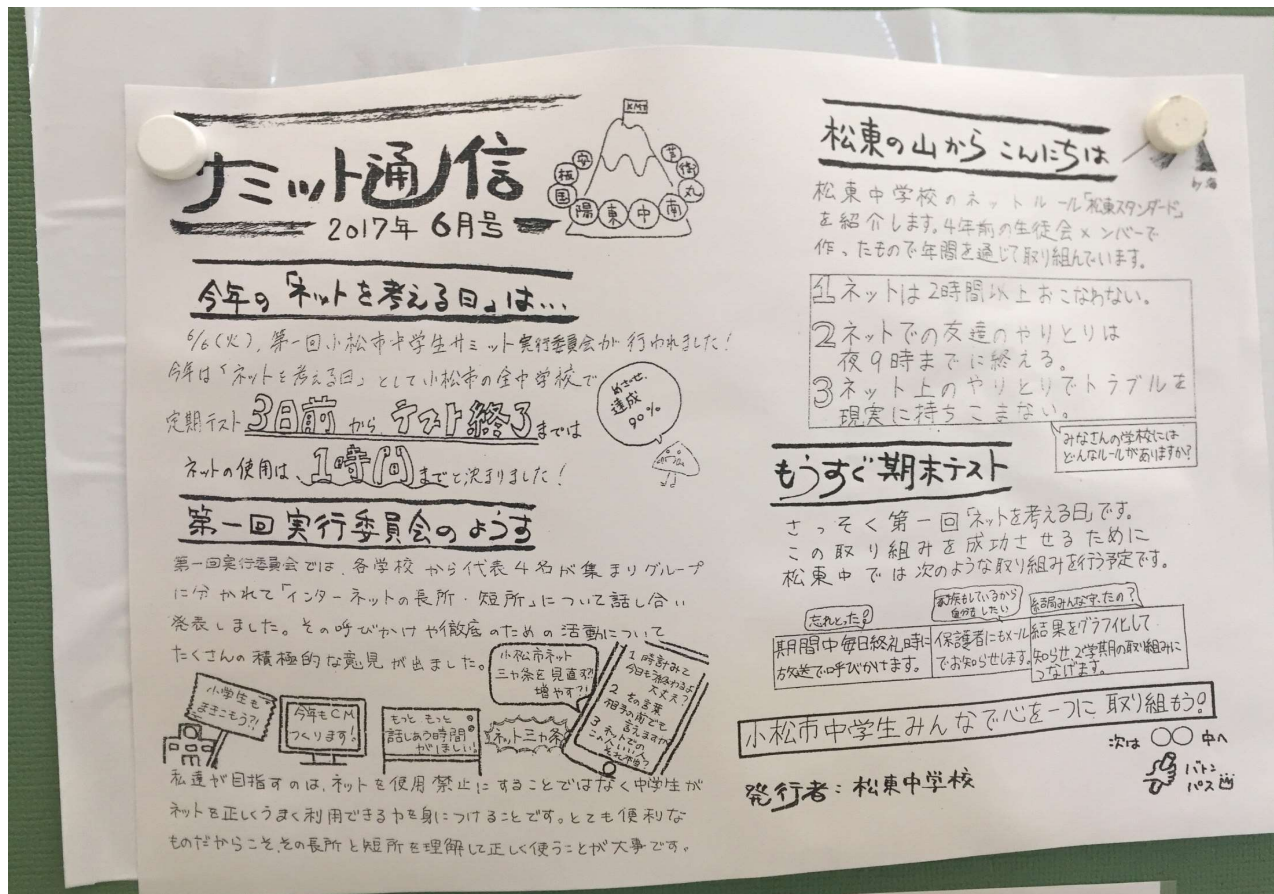


写真3 小松市中中学生サミット通信

さらに、それぞれの取り組みを交流していくために、各校が持ち回りで「サミット通信」を作成し、小松市すべての小中学校に配布している。作成は、各中学校の生徒会執行部で、月に1回発行。すべての児童生徒に向けて印刷して配布している。各号の内容は、それぞれの中学校に任されているが、創刊号を作成した小松市立松東中学校が作成した題字は、以後もずっと使って、一貫性を持たせている。

③啓発動画（CM）作成

「サミットの中では盛り上がるが、一般生徒になかなか浸透しない」「みんなが自分の問題として考えてくれない」等の声があがり、より身近に感じてもらうために、「啓発動画（CM）」作成に取り組んでいる。各中学校や校区の小学校等での啓発活動に活かしている。



写真4 小松市中学生サミット啓発動画

④取り組み交流

サミット発表会で、各中学校の取り組みを発表し、全員で聞きあい、情報交流を行った。自校での取り組みだけでなく、小学生への授業等、様々な活動が各中学校単位で行われており、刺激になったようである。

⑤小松市PTA連絡協議会の取り組み

子どもたちの動きに感銘を受けた小松市PTA連絡協議会が、中学生サミットの動きに連動している。子どもたちと保護者が意見交換する場面が増えていて、相互理解が進んでいる。

・保護者対象アンケート（4408人）を実施（小松市全小中学校）

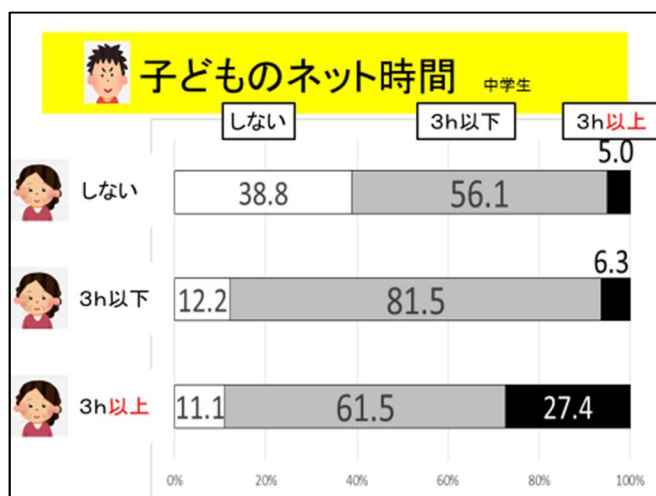


図18 保護者のネット時間別子どものネット時間

保護者対象にアンケート調査を実施し、実態調査。アンケート作成、集計、分析には研究代表者とソーシャルメディア研究会が当たった。小松市保護者サミットを実施し、対策のための方策を話し合った。最終的には、「小松市保護者ネット三か条」を策定し、小松市スマホサミット発表会で、子どもたちにも示した。左は、「保護者のネット時間別、子どものネット時間」である。「ネットをしない保護者の子ども」で3時間以上ネットをしているのは5.0%であるが、「3時間以上ネットをする保護者の子ども」は27.4%である。この結果だけで多くを語るのは危険だが、多くの保護者に対して警鐘を鳴らせたようである。

（３）各学校の取り組み

小松市中学生サミットでの動きを受けて、各学校で各学校の実態に応じた取り組みを実施している。実態が違うので、各校の取り組みは様々である。主な取り組みを以下、記載する。

①朝礼、全校放送等での啓発

生徒会執行部等が朝礼や全校放送の機会に「スマホ三か条」等についての説明や啓発活動を行った。その際、小松市中学生サミットで作成した「啓発動画」を活用した。

②クラス討議

アンケート結果をもとに、各クラスで「自分たちとスマホのつきあい方」等について討議を行った。

③小松市スマホ新聞の発行

前述しているが、各中学校生徒会が持ち回り作成し、小松市全小中学生に配布している。児童生徒を通して保護者の目に触れることも多く、そこからの反響も大きい。

（４）考察

小松市は、市教委、ＰＴＡ連絡協議会あげて中学生の活動を支援している。徹底しているコンセプトは子どもたちの思い、考えを最優先していることである。子どもたちの考えや思いを大人が聞き取り、それを実現していく。様々な取り組みを子どもたちが実現していくという意味では、最先端の取り組みの１つだと考えて良いだろう。小松市の今年度の取り組みから見えてきた、小松市の取り組みから、典型としての「スマホサミット」のポイントを見ていきたい。

１つ目は「子どもたちが実態を知っている」。スマホ等、ネットに関わることは大人は実はわかっていない。子どもが一番知っていて、しかも状況は刻々と変化している。特に子どもたちのネット上での流行等は３ヶ月程度で変化している。大人が状況に追いついたら、子どもたちは先に進んでいる。そのため、スマホサミットでは、最初に必ず子どもたち自身が実態を話し合う時間を持っている。具体的には「ネットの良いところ、悪いところ」を話し合うことにしている。話しがそれるが「良いところ」を出させることは実は重要で、ここで「悪いところ」だけで話し合わせると、「大人はスマホを悪と捉えている」というメッセージになってしまう。

２つ目は「子どもたちにとってクールなものに」。大人が求めるものではなく、学校の一般の児童生徒にとってかっこよいことが重要なことである。評価者は子どもたち自身であることがポイントである。様々な場面で、子どもたちが他の子どもたちの活動について評価する段階を用意する。大人と子どものギャップが起きておもしろい場合が多い。

３つ目は、「大人と子どもが一緒に考える」。子どもたちの思いを中心に据えると書いてきたが、実は子どもたちではスマホやネットの問題の解決は難しい。大人と子どもが一緒に考えることが必要である。子どもは実態を知っているが、対策を考えることはできない。大人は対策を考えることはできるが、実態をよくわかっていないので、有効な対策ができない。だから「大人と子どもが一緒に考える」ことが必要なのである。

小松市では中学生の思いをできるだけ対策に反映させてきているが、実は実際には大人が中学生の取り組みに口を出す場面はかなり多い。もちろん、子どもたちに請われて口を出しているのだが、この微妙な関係が実は非常に重要である。

そういう意味で、ＰＴＡ協議会の取り組みは重要である。思春期の子どもたちにとって、自分の保護者に対してはなかなか言えない言葉が、サミットの一員として保護者に向き合うことで、冷静な思考ができるようである。今回の収穫の一つである。

小松市の取り組みは、「携帯電話の所持が条例で禁止されている県」での取り組みとしては異色の取り組みと言えるが、子どもと大人が同じ方向を向いて議論をしていくという意味では、全国のモデルになりうると考えている。

5 総合考察

今回、多くの地域の「スマホサミット」等に関わったが、どことして同じ課題を持っている所はなかった。それぞれに独特の課題があり、それに対する対応策も一つとして同じではない。

今回は典型例として、「スマホに潜む危険を考えるシンポジウム～デートDV & JKビジネス～」と「小松市スマホサミット」を取り上げた。前者は新しい課題として、今後多くの地域が直面する課題として先進的に取り組んだと言えるだろう。後者は、これまでの多くのサミットの集大成とも言えるべき取り組みで、子どもたちと大人が一緒に鳴って取り組んだ好例である。

成果としては、子どもたちを取り巻く深刻な状況がある程度把握できたことである。今回の研究で明らかになったことの多くは、大人が知り得ないことが多く、そういう意味では今後も引き続き、取り組んでいくことが必要だ。さらに、子どもたち自身が課題を見つけて解決策を考えていくことは様々な意味で意義深い。当事者意識が高まり、子どもたちの実態に即したものにしていけるだけでなく、彼らの保護者の共感もよびやすい。思春期の難しい時期なので、なかなか本心を言葉にすることが難しい。自分の保護者であれば特にそうであるが、サミットとして保護者に向き合う場合、一般論として語り合うことができるので、有意義な話し合いができた。

課題としては、今回知り得た多くの課題をいかに次に引き継いでいくか、である。多くの地域でサミットに参加するのは最上級生である。小学6年生、中学3年生、高校3年生である。こういう子どもたちは卒業していき、翌年はまたその年の最上級生が参加する。地域としての継続性はあるが、子どもたちの継続性が難しい。ほとんどの地域で課題としてあがっていたことだ。奇しくも小松市の場合は、子どもたちの発案で、毎回、中1～中3が参加している。そういう意味でもモデル地域である。

成果、課題、それぞれ大きいのが、今後も継続して取り組んでいくべきテーマである。

【参考文献】

- 内海裕子 (2017) 「いわゆる「JK ビジネス」の現状と対策」 警察政策 19, 200-223
- 大阪府 (2018) 「デートDV とは」 <http://www.pref.osaka.lg.jp/danjo/dv/detodv.html> (2018 年 6 月 13 日確認)
- 小野淳ら (2008) 「サイバー型いじめ(Cyber Bullying)の理解と対応に関する教育心理学的展望」 千里金蘭大学紀要, 5, 35-47
- 警察庁 (2018) 「JK ビジネスはNO！」 <https://www.npa.go.jp/bureau/safetylife/syonen/jk-business/jk-taisaku.pdf> (2018 年 6 月 13 日確認)
- 新谷洋介・長谷川元洋 (2013) 「Android スマートフォンユーザ向けワンクリック詐欺疑似体験教材の開発」 情報処理学会論文誌 54(8)
- 鈴木英男ら (2012) 本人追跡性を基礎とする携帯電話の情報モラル教育 東京情報大学研究論集 16, 23-32.
- 総務省 (2013) 「平成 25 年度青少年のインターネット・リテラシー指標等」の公表
- 竹内和雄 (2012) 「スマホチルドレン対応マニュアル」 中公新書
- 竹内和雄 (2012) 「家庭と学校で語り合う スマホ時代のリスクとスキル」 北大路書房
- 竹内和雄 (2012) 「スマホやネットが苦手でも指導に迷わない スマホ時代に対応する生徒指導・教育相談」 ほんの森出版
- デジタルアーツ (2017) 未成年の携帯電話・スマートフォン利用実態調査 http://www.daj.jp/company/release/2017/0301_01/ (2018 年 6 月 13 日確認)
- 内閣府 (2011) 「青少年のインターネット利用環境実態調査」の結果について
- 森本 敦司 (2017) 「JK ビジネス対策の新段階：特定異性接客営業等の規制に関する条例について (特集 女性と子どもを守る)」 季刊現代警察 42(3), 10-14

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
リアルもネットも悩みの種に（単著）	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 4
写真で判断する出会い一般化（単著）	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 5
予想超え身近 ルール決め急げ（単著）	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 6
大人全員で計画的に達成感を感じさせる（特集 超一流が教える「ほめられ学級」のつくり方）（単著）	授業力&学級経営力 明治図書	2017. 6
スマホ・ネット依存に注意（ネット依存の悪循環）（単著）	中学保健ニュース 少年写真新聞社	2017. 6
スマホ時代の子どもたちのために～インターネットに起因する性被害に焦点を当てて～（単著）	青少年の非行・被害防止対策公開シンポジウム テーマ：子供の性被害の根絶を目指して（パネルディスカッションまとめ） 内閣府	2017. 7
不登校、学業不振からみる、スマホ時代の子どもたち」インターネット時代のメディアの問題点とその対策（単著）	月刊「チャイルドヘルス」連絡 治療と診断者	2017. 7
スマホ時代の生徒指導	生徒指導指導者研修 教員研修センター 文部科学省	2017. 7
スマホ時代の子どもたちのために～〈ケータイ・ネィティブ2世〉との新たな「たたかい」	関西福祉大学教育実践フォーラム招待講演	2017. 8
スマホ時代の子どもたちのために（単著）	i-Net 数研出版社	2017. 9
A i 時代に英語教育は必要か＜改めて振り返る、こんなに変わった英語指導＞（単著）	英語教育 大修館	2017. 9
生活の一部 大切なのは「使い方」	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 9
デートDV 高校生にアンケート調査（単著）	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 10
絶対役立つ教育相談 学校現場の今に向き合う（藤田哲也監修 水野治久ら著）	ミネルヴァ 書房	2017. 10
話し合い、納得のルールを（単著）	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 11
子のネット利用の是非 大切なのはバランス（単著）	日本教育新聞社連載1（知っておきたい子どものネット世界）	2017. 12
「かまちょ」が裏垢に『#死にたい』で即リプ	日本教育新聞社連載2（知っておきたい子どものネット世界）	2017. 12
ネットに救い求める危うさ	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2017. 12
「寂しさ」からの逃げ場に	日本教育新聞社連載3（知っておきたい子どものネット世界）	2017. 12
「16歳女 家出したい」に返信 25 通	日本教育新聞社連載4（知っておきたい子どものネット世界）	2018. 1
日進月歩の安全対策大人も学んで	毎日新聞連載（竹内先生の新教育論 スマホっ子の風景）毎日新聞社	2018. 1
教師の言動も動画で拡散	日本教育新聞社連載5（知っておきたい子どものネット世界）	2018. 1
スマホ時代の子どもたちのために～	四国総合通信局松山部会	2018. 1
スマホ時代の子どもたちのために～〈今、PTAに求められること〉	栃木県PTA連絡協議会研修会	208. 1
J Kビジネス『働くかも』クラスに2人	日本教育新聞社連載6（知っておきたい子どものネット世界）	2018. 1
ゲームに課金『ガチャ』にはまる子どもたち	日本教育新聞社連載7（知っておきたい子どものネット世界）	2018. 1

LINE のスタンプに課金『バイト』でポイントためる子 も	日本教育新聞社連載 8 (知っておきたい 子どものネット世界)	2018. 2
田舎で『密林』でブランド購入	日本教育新聞社連載 9 (知っておきたい 子どものネット世界)	2018. 2
富山県インターネットルールづくり研究会(高岡地区 ルールづくり)	富山県ルールづくり (富山県教育委員 会)	2017. 2
スマホ時代の児童自立支援施設の子ども支援につい て考える	中国地区児童自立支援施設研究会招待 講演	2017. 2
スマホ時代の子どもたちへの支援のあり方を考える	四ツ橋大学研修大会招待講演	2017. 2
彼氏の『誕プレ』、ネットのフリマに	日本教育新聞社連載 1 0 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 2
ビデオ通話して会えば大丈夫！？	日本教育新聞社連載 1 1 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 2
大事なものは「いつから解禁」	毎日新聞連載(竹内先生の新教育論 ス マホっ子の風景) 毎日新聞社	2018. 2
言うこと聞かない子 鬼に叱ってもらったOK？	日本教育新聞社連載 1 2 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 3
ケータイ・ネイティブ 2 世出現！	日本教育新聞社連載 1 3 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 3
ユーチューブ視聴、ゲーム機から	日本教育新聞社連載 1 4 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 3
	日本教育新聞社連載 1 5 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 3
大人が思う以上の重い選択	毎日新聞連載(竹内先生の新教育論 ス マホっ子の風景) 毎日新聞社	2018. 3
中 1 の 4 月 は L I N E に 夢 中	日本教育新聞社連載 1 5 (知っておきた い子どものネット世界)	2018. 3